

熊谷元直における殉教理解と武士道精神

中井 志磨

はじめに

16世紀から17世紀にかけての日本のキリスト教史から見る状況は、所謂キリシタン禁制の時代であり、多くの殉教者が現れた時代である。注目すべき点は、日本での宣教開始から程無くして、歴史に刻まれる程の殉教者が現れたことである。当時の日本人は西洋人を「南蛮人」と呼び、その外見からしても特異なものとして見ていた。そのような人々が持ち込んだ宗教を受容するだけでも奇異なことだったと推察すると、さらにその宗教のために自らの命を絶つ殉教という行為は、常軌を逸脱した行為のように映る。殉教の背景を見る時、西洋キリスト教思想から来る殉教という概念を何の抵抗もなく受容し、容易に殉教という道を選んだとは考え難い。つまり殉教思想のみではなく、当時の日本人が慣れ親しんでいた何らかの日本的素地があったからではないかと考えるのである。そもそも殉教の「殉」という漢字には、「従う」という意味がある。殉教の場合、キリストの教えに従い、キリストに倣って死ぬということである。従うという意味を踏まえて日本文化に目を転じた時、命を懸けて主君に従うことを何よりも重んじた武士道に着目するのである。武士道でも特に、死をもって殉ずるという行為を採る殉死の思想に殉教との関連性を見出す可能性を探るのである。そこで、次章で殉死の定義を再考察し、殉死と殉教の間にある相互作用を明らかにしたい。

1. 殉死の定義と殉教の共通性

日本史学者の山本博文は著書『殉死の構造』の中で以下のように記している。「一般に「殉死」とは、高貴な身分の人や主君などが死んだ時、その従者や妻子らが死者に従って自殺することを言う」⁽¹⁾。仮にこれを殉死の定義とした時、キリシタンの殉教者と殉死の関連性は見られるのだろうか。ここで殉死の定義と殉教を比較する意味は、日本人キリシタンの殉教者があれ程出た理由に、殉教という現象の中には何らか

(1) 山本博文『殉死の構造』弘文堂、1994年、37頁。

の日本的な素地があったからではないかと考えるからである。そうした日本的なメンタリティが殉教の思想と部分的にでも合致したと考えるならば、殉教者の殉教理解に影響を及ぼしたと考えられる。それゆえに、日本的な素地を殉教の思想に見出し、関連させるのも無意味ではないだろう。以下で、先に挙げた殉死の定義に沿って殉教との共通項を順に考察したい。

まず、「高貴な身分の人や主君などが死んだ時」という箇所では主君が「死んだ時」、つまり主君の死の直後に殉死するという条件である。しかし、16世紀日本のキリシタンはイエス・キリストの死から年月が経ち過ぎているために、時間的問題からイエスの死の直後にイエスに倣って死ぬというのは該当しない。次に、「従者や妻子らが死者に従って自殺する」という箇所はどうだろうか。「自殺する」というのは、明らかにキリスト教の教えに反しているため、この箇所も倫理的側面から考えてキリシタンの殉教観には該当しない。けれども、自殺が何らかの自発性を伴うものであるという点に注目したい。自発性を伴う死という点からキリスト教における殉教を見ると、迫害に対して抵抗しない、あるいは逃亡しないなどといった殉教への自発的意思が窺える。自発性の要素を殉教と殉死における共通項として見るために、「自殺する」を仮に「殉教する」と読み変えると以下ようになる。「従者や妻子らが死者に従って殉教する」と。この文章が指す死者に「従って」死ぬことというのは、キリシタンの場合、死者すなわちキリストを指すのであるから、キリストに従って死ぬ事となるのである。「従って」死ぬというのは、主君への忠誠心から来るものであるから、この点において殉教と殉死は共通項を見出すことが出来るのである。さらに、「従者や妻子ら」というのはキリシタンの場合「信者」に相当すると思われるので、これと置き換えてみると、「信者らがキリストに従って殉教する」となる。つまりキリシタンの殉教観と比較して殉死の定義を再考察すると、「信者らが死者に従って殉教する」という殉教観とも一致するのである。したがって、殉死の定義と殉教、このどちらにも存在する唯一の共通項は「従って死ぬ」ということなのである。

さてここで、前に触れた漢字「殉」の事柄に戻ると、殉死・殉教共に「殉」という漢字が用いられている。すなわち字面においても「従う」という意味が含まれているのであり、またどちらの場合にも主君への忠誠心を持って死ぬことを指すのである。そうすると、キリストへの忠誠心を持つがゆえにキリストに従って死んだキリシタンは、一つの殉死であると考えられるのではないだろうか。殉死と殉教の関連性から取り組んだ研究には本論で取り上げる宮崎賢太郎の「キリシタンの殉教精神と武士道についての一考察」⁽²⁾ が挙げられる。そこで次章ではこの論文を再検討し、殉死と殉教

(2) 宮崎賢太郎の「キリシタンの殉教精神と武士道についての一考察」『長崎純心大学紀要』、長崎純心大学・長崎純心大学短期大学部、1981年、37-47頁参照。

の相互性を考察する。

2. キリシタン殉教と殉死の相互性

一般的にキリスト教受容において武士道の要素を唱えたのが海老沢有道であり、そこから殉死を導き出すならば、それを具体化したのが宮崎賢太郎である。宮崎は、殉教者が多く現れた背景にはキリスト教思想から来る殉教という概念のみではなく、当時の日本人がもつ殉死という概念があったからだと考えている。

殉死の概念は、武家思想、特に「道の自覚」に生きる士道ではなく、鎌倉武士道の流れを汲み、『葉隠』⁽³⁾に結晶する「死の覚悟」に生きる狭義の武士道の生死観に由来する。海老沢有道が「切支丹と武士道の倫理思想的交渉」⁽⁴⁾と題する論文において、近世初頭にヨーロッパよりもたらされたキリスト教が、質的問題は別として何故あれ程短期間で日本人に受容されたかという要因について、以下のように述べている。鎌倉の頃より武士の間において倫理的、道徳的に高められてきた、いわゆる武士道が武士のみならず、広く一般民衆にまである程度影響を及ぼしており、主君に対する絶対的な忠孝思想の存在が唯一の創造神デウスへの絶対的帰依というキリスト教の教義を容易に理解させた一因である、と⁽⁵⁾。海老沢のこの武家思想の理解では、近世の武家思想における二潮流、すなわち葉隠的武士道と儒教的士道を区別していない。だが宮崎は武家思想の忠孝理解が、キリスト教受容の一因のみならず、キリシタンの殉教思想を解明する手段として一層有効であると述べている。そこで、武士道と士道の違いを明確に区別し、殉死についての見解の相違をより明らかにしている。まず武士道において代表的な『葉隠』を見ると、「武士道とは死ぬことと見付けたり。二つ二つの場にて、早く死方に片づくばかり也」(聞書一―二)⁽⁶⁾とある。この言葉は葉隠の精神を最も鮮やかに示している。また、常住死身の思想、つまり常に死身になり切って初めて武士としての恥ない一生を送ることが出来るとともに、奉公人として落度なく主人に立派に仕えることが出来る、死の覚悟の思想も殉死に繋がるものである。『葉隠』の著者である山本常朝自身、主君に対する命懸けの奉公を決意しており、要するに武士道における生死観とは、主君の高上なる御恩に対して、命を懸けた奉公をするという忠孝観から来ているのである。

(3) 成立について不明のことが多いが、ほぼ山本常朝を心の師と仰ぐ田代陣基が中心になって享保元年(1716年)までに編集されたものと思われる。全11巻の内、第1、2巻は陣基が常朝の言葉を聞き書きしたもので、常朝の思想はこの両巻に端的に現れている。相良亨『日本人の死生観』ベリカン社、1984年、138頁。

(4) 海老沢有道「切支丹と武士道の倫理思想的交渉」『切支丹史の研究』新人物往来社、1959年、11頁。

(5) 同上、11―12頁。

(6) 山本常朝著・松永義弘訳『葉隠 上』教育社、1981年、38頁。

一方、士道における殉死の思想は、死の覚悟を基本に置く武士道に対して、道の自覚を根本とする。山鹿素行の「殉死を弁ず」という段においては、世の中が殉死を義の行為としているために、有用な仕事をなすべき人たちまでもが、殉死をとげることによって一時の快樂を得ようとすることを嘆いている⁽⁷⁾。士道の立場からは殉死はすべて無益、無用視されているのである。士道において「天命」に従うことは武士道の遮二無二死へ突き進むという精神とはかけ離れており、命懸けの献身と言う意味は薄いと言わざるを得ない。したがって、キリシタンの殉教には葉隠的武士道が関わっている可能性があると言える。

武士道から端を発した日本近世の流行現象である殉死は、心理的な強制があるにせよ、あくまで殉死者の意思で病死した主君を追って自殺することにその特徴がある。このような狭義の殉死の起源をたどるとすれば、明徳三年（1392）、病死した官領細川頼之の後を追って切腹した三島外記入道が最初である。これを記している『明徳記』では、病死した主君のあとを追うなど前代未聞のふるまいだとしている。すなわち非常に稀な行動ではあるが、この出来事が殉死の初出例であることは興味深い⁽⁸⁾。

これによっても、武家時代における殉死が江戸時代より遡ることは確かであり、キリスト教が日本に入る前に殉死の思想が復活していたことが確認できる。

武士道の精神が御恩と奉公という主従関係から成り立っているのは言わずと知れたことであるが、その中でもとりわけ武士道の生死観がキリシタンの教義書「丸血留の道」⁽⁹⁾に影響を与えたと宮崎は指摘する。この教義書には、デウスの計り知れない御恩を知り、真の道を知ってから棄教する者は、教えを知らずに居る者よりも罪ははるかに重いことを具体的に十の罰を挙げて、棄教がいかに恐ろしいことであるかが述べられている。また迫害の場はキリシタンにとってヒイデスの戦場と認識され、クルスの御旗の下に勇敢に戦うことはキリシタンの弓箭の手柄であるとされている。この発想はまさに武士の慣習を熟知し、その精神から影響を受けたものであると言うことができる。さらに、キリストの十字架上の死を第一の御恩として強調し、そのキリストに倣うように説いている。このことから、主君の御恩と命懸けの奉公という主従関係が根底に有ることを窺わせるのである。特に以下に引用する一説は『葉隠』の常住死身の思想を受けて殉教思想が説かれている例である。「世界の慣を見よ。武家奉公の輩は、少しの恩賞を受るに依、命を捨てても主人の用に不而不立而不叶儀也。去ばパウチズモを授奉時、ガラサ、善徳、色々のサカラメント数限り無き御恩は莫大なる所

(7) 山鹿素行著・田原嗣郎編『山鹿語類』第13「臣道1」、中央公論社、1971年、184－186頁。

(8) 山本博文『教科書には出てこない江戸時代－將軍・武士たちの実像－』東京書籍株式会社、2008年、113－120頁。

(9) この書はその内容から見て、1614年の大禁教令から1622年の長崎大殉教の頃に世に出たものと思われる、その著者は元武士であった日本人教師の一人であったことが想像される。

領の心なれば、キリシタンたる者は、御主ゼズス・キリシト御名誉をかかげ奉らんが為に、右の果し無き御恩の数々を与へ被下れたりと思案せよ。故に戦の題目出来るべき時分には、打死の覚悟を専に心掛くべし」⁽¹⁰⁾。武士階級においては主従関係における御恩と奉公のこのような道理は直ちに了解されたことであろうし、武士階級以外の階層の人々においても十分な説得力を持つものである。殉教者となるためには、「打死の覚悟を専に心掛く」程の意志がなくては成せないことであるから、覚悟を常住不断に心掛けておくことが肝要であると説いているのである。

確かに、この所が殉教精神の理解を容易にするのであるが、しかし武士道とキリシタンの生死観には根本的な相違が見受けられる。それはその殉ずる対象のレベルの違いである。『葉隠』の中では「此主従の契より外には、何もいらぬこと也」(聞書二一六四)⁽¹¹⁾とあるように、武士道における殉ずる対象は現世の主君という「可視的」存在なのである。武士道に対してキリシタンの殉ずる対象は人格神の要素を持つとはいえ、「不可視的」存在であり、16世紀にキリスト教が日本へ伝えられる以前には、日本人にとって不可視なる存在に対する命を懸けた絶対的献身という思想は極めて希薄であったと思われる宮崎は指摘している。それでは如何にして日本人は、可視なる存在のみならず、不可視なる存在に対しても命を懸けて絶対的献身をするという意識を持ち始めたのだろうか。もちろん、キリシタンの教義書あるいは殉教教育が可視的なものから不可視的なものへの理解の転換に影響を与えたことは上述した通りであるが、しかしそれでは推測の域を出ない。そのような価値転換が実際に成されていたのか否かは、史料を用いて考察するほかない。したがって、次章ではそのような可能性をもつ殉教者を採り上げ、武士道精神の影響を受けていたのか考察する。殉教思想に武士道精神の影響を見極める際のポイントとなるのは以下の3点である。1. 死者に従って死ぬ2. 主君への忠誠心3. 常住死身の思想である。これらの点を探りつつ、具体的な殉教の記録を用いて、そこに殉死の思想が部分的にでも見受けられるのかどうか検討したい。

3. 熊谷豊前守元直の例

熊谷元直(1555-1605年)は、毛利輝元の家臣として、四国征伐(1585年)や九州征伐(1587年)、小田原征伐(1590年)や文禄の役(1592年)などに従軍して活躍する。1587年、黒田孝高の影響を受けて、九州征伐の間に簡単な教えを学んでキリシタ

(10) 海老沢有道他編「丸血留の道」『キリシタン書・耶蘇書』(日本思想史大系25)、1970年、岩波書店、340頁。

(11) 前掲書、『葉隠』179頁。

ンとなり、メルキオルという洗礼名を名乗った。しかしその後、彼は一度キリスト教信仰から離れてしまうが、大阪普請の際にイエズス会宣教師と二日間話をする事で信仰を取り戻し、司祭のもとに書簡を送って次のような決意を示した。「自分は今後は、一度受け入れた信仰にふさわしい生活をしようと望んでいる。自分は毛利の邸の多数の殿たちを自分の意見に従わせるために、あらゆる障害を取り除く心算である」と⁽¹²⁾。信仰に熱意を取り戻した熊谷は、毛利家中に徐々に育ちつつあったキリスト教徒グループの頭であり援助者となっていた。しかし毛利が熱心な仏教徒であったことと、家康の秘書である僧承兌は家康から全幅の信頼を受け、また政治の世界にも大きな影響力を持っていたこともあり、毛利は承兌の反キリスト教活動に応じた行動に出る。山口の教会を閉鎖し、イエズス会士を追放、キリシタンに棄教を求めるよう計らった。すでに領内には多数のキリシタンが存在していたため、キリシタンが反抗するのを恐れたと考えられる。毛利の反キリシタンの態度が進むにつれて、キリシタンたちは団結し、最悪の事態を覚悟するようになった⁽¹³⁾。

ついに、熊谷は主君の毛利輝元からキリスト教の棄教を命じられたが、「それはできることではないし、生命を賭しても自分はそうはしない。なぜなら、（靈魂の）救済と永遠の命があること、そしてこれはキリシタンの教法においてしか得ることができないことを、よく心得ているからである」⁽¹⁴⁾と棄教を拒み、あくまでキリストへの忠誠心を表明した。熊谷が棄教命令に応じなかったため、益田元祥との権力争いの側面もあるが、1605年にかねてより命じられていた萩城の築造の遅れを理由に一族の天野元信らと処刑された。処刑が決まる前から熊谷は次のように言っていた。「自分はあらゆることについて主君に従い、忠誠を貫くであろうが、ただ、真の救い主なるキリストの教えだけはどのようなことがあっても棄てないし、そのためにはむしろ生命を投げ出すであろう」。この言葉からは、「あらゆることについて主君に従い、忠誠を貫く」という毛利への忠誠心を「貫く」と言明してはいるが、「ただ、真の救い主なるキリストの教えだけはどのようなことがあっても棄てない」とも言っており、キリストへの忠誠心も同時に見られるのである。つまり、武士熊谷の主君である毛利への忠誠と、キリシタン熊谷の主君キリストへの忠誠心は決して相反することなく、同じように存在しているのである。また、1605年の年報においても「毛利殿は実際には信仰のために自分を殺すのであるが、彼に対する忠勤さについていささかも反しない」⁽¹⁵⁾とあり、「信仰のために」殺されると分かっているながらも、主君毛利への「忠勤さについていささかも反しない」と明言しているように毛利への忠誠心は失ってい

(12) 松田毅一編『16・7世紀イエズス会日本報告集』第1期第2巻、株式会社同朋舎出版、1987年、230頁。

(13) 松田毅一編『16・7世紀イエズス会日本報告集』第1期第4巻、株式会社同朋舎出版、1988年、246頁。

(14) 松田毅一編『16・7世紀イエズス会日本報告集』第1期第5巻、株式会社同朋舎出版、1988年、74頁。

(15) 同上、75頁。

ない。つまり「忠誠を貫」いているのである。この言葉が示すのは、信仰者自身においては信仰を固持し続けることが主君への不忠とはならないということである。棄教を命じる主君に従わず、信仰を保持することは、主君への不忠であると一見考えられるが、しかしキリシタン熊谷の中では必ずしもそうではないのである。したがって、武士として、またキリシタンとしても忠誠心が混在していると言える。「主君が、私の教えを直ちに棄て去れと命じ給うのなら、私の生命を召すより他はないであろう。ことに死が、キリストへの信仰告白のために特別の幸福をもたらしてくれるからには、私は自分の命を喜んで失うつもりである。それ故、私は貴方がたに願う。キリシタンなるが故に主君が私に死を給うのならば、私は何時なりとも刃向うことなくこれを甘受し、我が身を荒縄でくくって刑場に引き行かせ、そこにて主君が命じ給う死罪を我が身に引き受ける用意はすでに出来ていると、そのように主君に伝えてほしい。私は、天なる主にかけて、また私の魂の至福にかけて、自分の言葉を守り抜くことを誓う」⁽¹⁶⁾。この言葉からも「主君が命じ給う死罪を我が身に引き受ける用意はすでに出来ている」とあるように、死の覚悟を持ちながら生きている常住死身の要素を読み取ることが出来る。「私は何時なりとも刃向うことなくこれを甘受し、我が身を荒縄でくくって刑場に引き行かせ」という記述からは、キリストの死に様に倣おうとする姿勢が窺える。また「手に携えているその紐で、予を縛ってもらいたい。そのように縛ったまま毛利殿の前に連れて行き、そこで命じられていることを予に執行されたい」⁽¹⁷⁾ともあり、形態的にもキリストを模倣する熊谷の姿を見ることが出来る。このような熊谷の発言の中には、毛利とキリストへの忠誠心の混在が何度も表れているのである。

さらに、熊谷の言葉に度々登場する「生命を投げ出す」「私の生命を召すより他はないであろう」「私は自分の命を喜んで失うつもりである」という言葉からは、熊谷がすでに殉教の覚悟をしていることが分かる。いつ死が訪れようとも準備は出来ているという覚悟を持ちながら生きるということ、これは2章で触れた武士道の死の覚悟である常住死身の精神であると言える。常住死身とは、常に死身になり切って初めて武士として恥のない一生を送ることが出来るというものである。では、恥のない一生とはどういうことを指しているのだろうか。「覚悟は、死の覚悟という仕方で用いられるが、また奉公の覚悟という仕方で用いられた。しかも、この覚悟は別のものではなく、一般に武士において死の覚悟は奉公の覚悟をふくみ、奉公の覚悟は死の覚悟をふくんでいた。2つの覚悟は、実は1つの覚悟の両面であった」⁽¹⁸⁾という覚悟の二面性を肯定するならば、この武士としての覚悟、死の覚悟を生き切り、一度決意し

(16) 前掲書、松田編、第1期第4巻、247頁。

(17) 前掲書、松田編、第1期第5巻、79頁。

(18) 前掲書、相良亨、117頁。

た覚悟は守り通すということが武士として模範となる一生なのである。言い換えると、覚悟の持つ二面性の比重が偏ると、それは武士が持つべき覚悟の性質からも外れるということになるのである。前述したように熊谷は再びキリスト教の教えを取り戻す際に決意したことがある。「自分は今後は、一度受け入れた信仰にふさわしい生活をしよう」と望んでいる。自分は毛利の邸の多数の殿たちを自分の意見に従わせるために、あらゆる障害を取り除く心算である」というものであった。この決意を、武士の覚悟として守り生き切るものだと捉えていたならば、先に引用した「主君に従い、忠誠を貫く」という熊谷自身の言葉にあるように、まさに「貫く」覚悟を示しているのである。この決意を中途半端に終わらせることは武士としての道を捨てるということにもなる。つまり恥のない一生とは、覚悟を貫くということになるのである。「毛利殿がそのように命じる以上、死ぬ準備は出来ている」⁽¹⁹⁾ との言葉は、主君毛利への忠誠心と常住死身の精神が見受けられる武士熊谷の覚悟が前面に表れたものである。こうして貫かれるべきものとしての死の覚悟が、クリシタンの死の覚悟、すなわち「生命を投げ出す」という殉教の覚悟へと反映されているのではないだろうか。

クリシタンが信仰を貫くための教えは、『丸血留の道』に記されている。この中の「四 ヒイデスニ届コトハ如何程ノ題目、亦深キ功力ゾト云コト」⁽²⁰⁾ という段では、信仰を最後まで守り通すことについて以下のように記されている。「弓箭ノ時分ニ社、武士ノ手柄モ見ル者也。合戦ノ忠ニ依、大将ノ褒美ヲ受ルコト定タル法也」「御憲法ノ源ニテ在マスデウス、其忠・不忠ニ対セラレテ、賞罰ノ御返報ヲ被成ルベキコト、尤道理至極也」とあるように、武士の慣習を用いて、苦難の時にこそ信仰の深さが試されるとし、また御恩と奉公の主従関係による報酬を説いていることから、武士道的発想に立脚していることを明確に表している。そして、「第一勝レタルカリダテ」⁽²¹⁾（ト）云ハ、デウスニ対シ奉テ命ヲ奉ルコト也」と、命を捧げることが神に対する一番の愛であると記されている。デウスはヒイデスの合戦における忠・不忠、その手柄に応じて報酬を与えられ、その最も優れた忠、あるいは奉公が、命を捧げること、すなわち殉教であると言う。殉教することになろうとも信仰を守り抜く覚悟を持つことは、死の覚悟を持つことと同じである。死を覚悟して生きる武士にとってこの思想はそれほど相反したものではあるまい。両者が一人の人間の中で内在化した時、もはやそれは明確に区別できるような二元論的な思想ではなく、日本独自の精神文化である武士道とキリスト教が部分的に相俟って熊谷の生き様を築き上げたと考えられる。熊谷の発言からも見られるように、武士としての主君と信仰の主君キリストへの忠誠心

(19) 同上。

(20) 前掲書、海老沢編、「丸血留の道」345-356頁参照。

(21) Caridade、ポルトガル語で愛を意味する。

は境界なく同時に存在したのである。

武士が属する封建的主従関係においては、御恩としての封土の給付に対する従者の献身的奉公によって成立していた。このような武士の属性を理解していたことがキリシタン教義書の中にも表れている。「ワツカ成ル辛勞ヲノガレントテ、妨ノ風ニ心ヲ靡カスニ於ハ、数年ノ欲ヲ以求メ集シ功力ノ宝ヲ悉失ベキ者也」「其忠節ト而、汝ハ云ニ不及、子孫末孫ノ上ニ、ベンサン⁽²²⁾トテ御哀憐・御擁護ノ御眸リヲメグラシ玉ベシ」「覚悟ヲ成スコトハ尤肝要也」主君の恩はつねに領地の封与あるいは恩賞という物質的側面によって裏付けられているため、これらの言葉には、主君の恩賞に依拠せずには生きられない武士の生活が表されている。言い換えれば、主君からの報与が得られなければ武士としての体面を保つことが出来ないのであり、家を存続させることが出来ない武士は恥となるのである。『葉隠』には「生々世々御家を歎き奉る心入れ、是れ御当家の侍の本意、覚悟の初門にて候」⁽²³⁾と記されており、自分の家だけでなく、主君の家のために満身創痍し、繁栄させるよう努める覚悟が求められている。キリシタンの教えにおいては「妨ノ風ニ心ヲ靡カスニ於ハ、数年ノ欲ヲ以求メ集シ功力ノ宝ヲ悉失ベキ者也」とあるように、キリシタンが迫害に耐えられなければこれまでに積み上げてきた徳は尽く失うことになるという。それは武士にとっては領地や俸禄を失うようなものであり、武士が何よりも大事にする家を絶えさせるということになる。家を存続させ、栄えさせるのは武士の務めであるから、「子孫末孫ノ上ニ、ベンサントテ御哀憐・御擁護ノ御眸リヲメグラシ玉ベシ」とあるように子孫に至るまで神からの祝福を受けて目をかけてもらえるというのは何よりの御恩なのではないだろうか。その御恩に応えるためには殉教の「覚悟ヲ成スコトハ尤肝要也」となるのである。

死の覚悟を持ち、常住死身になることで奉公人として落度なく主人に立派に仕えることが出来るという考え方は、武士とキリシタンどちらにも通ずるものである。熊谷のように武士であり、またキリシタンでもあった人物が覚悟を決めた時点で、それは武士としてもキリシタンとしても両方の立場を全うすることになるのである。熊谷は主君毛利から切腹を命じられた時、「自ら切腹することに関しては、キリシタンであり、奉じているキリストの教えが禁じているので、そうすることはできない」⁽²⁴⁾と、キリシタンの教えから切腹を拒んでいる。これはキリストへの忠誠心から出た発言であるが、だからといって毛利への不忠とは必ずしも言えない。なぜなら、毛利からの処刑宣告に対しては、反抗することなく受け入れ、処刑「される」ことには抗わなかつ

(22) Bencao、ポルトガル語で祝福を意味する。

(23) 前掲書、『葉隠』、208頁。

(24) 前掲書、松田編、第1期第5巻、79頁。

たからである。ただ「自ら切腹することに関しては」拒否したのである。主君の命令には従って斬首されているのである。もしも熊谷が処刑に抵抗する気持ちがあったならば、厳しい監視下にあったとはいえ準備する時間は十分にあったのである。しかし彼はキリシタンとして自殺を拒否し、手に綱を持って処刑に現れた毛利家の使者に自ら近づき、自分を縛るよう伝えたと言われている⁽²⁵⁾。キリスト教を捨てて武士として生きるのか、キリシタンとして生きて殉教するのか、そのどちらかの選択を迫られたのだが、熊谷はその結果殉死と殉教を選んだのである。武士として最後まで毛利の処刑に正面から向かっていき、最後まで主君に逆らうことなく生きたのである。またキリシタンとしての信仰を捨てることなく殉教した。棄教すれば武士として、また毛利家の家臣として何不自由なく生きることが出来たであろう熊谷は、それを望まずに、あくまで自分の主人はキリストであると貫いたのである。棄教ではなく殉教を選んだ彼の姿は主君である毛利に対して唯一反抗したものであり、自分の殉ずる対象、すなわち常住死身の対象が毛利家ではなくキリストであったことが明らかである。熊谷の殉教からは、武士としての主君に対する忠誠心と死の覚悟を持ち続けた殉死の思想も垣間見ることができると考える。

4. 結論

西洋で発生した殉教という思想を日本人が受容する際に、武士道精神が理解を容易にした可能性を検討するための実例として、本論では熊谷元直を取り上げた。主君への忠誠心を持ち、死の覚悟を持って従うこと。これらが武士とキリシタンのいずれにも共通する精神であるということは熊谷の例を通してより明確になった。本論では主君に対する忠誠、これこそが殉教と殉死の根底にあり、両者に通ずるこの概念が、信仰者の殉教理解に影響していたのではないかという可能性を探る試みを行った。武士の思想の中でも特に武士道における死の覚悟や御恩と奉公の主従関係は、「丸血留の道」に見られるように、キリスト教教義を根付かせる際に影響を及ぼしていたことは明らかである。

キリシタンであるがゆえに熊谷は、主君の毛利輝元から切腹を命じられた。信仰を守り続けて死んだので殉教者とされたが、しかし武士であった熊谷には、御恩と奉公の主従関係や常住死身の精神が身についており、こうした武士の精神は熊谷がキリスト教に触れる以前から培われていたものである。死の覚悟を持ち、常住死身の精神で主君に仕え、忠誠の心で従うことは武士の慣習であり、同質の心構えでキリシタンの

(25) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』家わけ第八 毛利家文書、東京大学出版会、1977年、101-102頁。

信仰を貫いたと考えられる。それゆえに熊谷には毛利とキリストの両主君に対する忠誠心が見られるのである。熊谷の場合、武士としてもキリシタンとしても主君に忠実に生きた結果が殉教であり、また主君毛利からの賜死であった。熊谷にとって武士としての死の覚悟と、キリシタンとしての殉教の覚悟はさほど相違無かったのではないだろうか。なぜなら、熊谷の武士としての土壌にキリスト教の教義が沿い合わさる形で受け入れられたために、殉教観と殉死の精神には部分的に相通ずる点が見受けられるからである。このことは、棄教はしないが主君への忠誠心は変わらないという熊谷の言葉からも窺えることである。したがって、熊谷の例から考察する限りにおいては、日本特有の武士道精神とキリスト教の殉教観が部分的に合致した結果、熊谷をはじめ多くのキリシタン殉教者が出て来たという可能性は否定できない。殊に、武士道における死の覚悟や御恩と奉公の主従関係に見る忠誠心は、キリシタン教義に多く用いられており、その教えを受けた熊谷のようなキリシタンが忠誠心をもってイエスに従い、忠義の表れとして殉教を受け入れていたのである。毛利とキリスト両方の主君に忠誠心を抱き、死の覚悟を持って従う意思是熊谷が死に至るまで貫かれた。そして処刑の際には、無抵抗で主君の命令に従う態度をとった。この姿からはこの世の主君である毛利輝元と、信仰の主君であるキリストに従った姿が垣間見られ、つまり武士としてもキリシタンとしても一貫した生涯を送ったと言えるのである。「自分はあらゆることについて主君に従い、忠誠を貫くであろうが、ただ、真の救い主なるキリストの教えだけはどのようなことがあっても棄てないし、そのためにはむしろ生命を投げ出すであろう。」という熊谷の言葉からは、武士としての忠誠とキリシタンとしての忠誠の両方を読み取ることが出来る。また、如何にこの世の主君である毛利輝元に従ったとしても、熊谷は信仰の主君であるキリストに背くことなく、最終的には信仰のために命を投げ出す覚悟をしていたことも分かる。しかし、殉教の道を選ぶまでの熊谷の生き様は、この世の主君である毛利輝元への忠誠を失うことのない武士道にも則ったものであり、また真の主君であるキリストに倣う殉教の教えにも則ったものでもあった。このような熊谷の例から、殉教思想を受容するにあたって、日本固有の武士道の中でも特に武士としての死の覚悟をもってする殉死の精神が影響を与えていたと推定出来る。